

HYMNS

『HYMNS (ヒムス)』

「登場人物」

○オガワ＝画家

○クロエ＝無職

○ナナシ＝画商

○ムメイ＝友人

#プロローグ

舞台は、一見、ただの黒い円筒。

よく見ると、複数の黒のバリエーションでできている。

スロープ状の花道が2本ついている。

天井から、ヒモが何本か張られている。

ヒモの先端には、フックが取り付けられていて、花道も含めた舞台面にある違う場所のフックに引っかけることによって、張り方を変えることができるようになっていく。

それぞれの花道に、黒い箱が2つずつ置かれている。

場面に合わせて、黒い箱（底の面が白くなっている？）を移動させ、それがテーブルになったりイスになったりする。

舞台中央のイーゼルに、真っ黒に塗り潰されたキャンバスが置かれている。

基本的にはオガワの部屋だが、ヒモの形状が変わることによって、別空間になる。

客入れの音楽が消える。

悪意に満ちた、加工された声のカラージュが聞こえてくる。（#ブリッジと同様）

オガワ、白い服を着て花道から現れる。

客席が暗くなる。

オガワ、ペインティングナイフを握っている。

舞台中央の黒い絵に向き合う。

暗転。

音楽。

舞台の内部が発光する。

床面のところどころに、スリットが開けられており、中から光が筋状に漏れる。

舞台には、各パーツをつなぎ合わせた隙間があり、そこから白い光がもれる。

黒い絵のあった場所に、黒い服を着たクロエが立っている。

クロエ、微動だにしない。

ナナシとムメイが、それぞれの花道から現れる。

二人はシンプルな黒っぽい（グレー系）服を着ている。

ナナシとムメイ、ヒモを何本かをオガワの手足に取り付け、オガワを操り人形のようにする。ナナシとムメイに操られて、オガワはペインティングナイフをクロエに突き立てようとする。クロエの手が不意に動き、ペインティングナイフを握ったオガワの手を掴む。

暗転。

1

オガワの部屋。

オガワとクロエがいる。

オガワの動きを封じていたヒモは外され、別のフックにかけられている。箱が二つ中央に置かれている。

クロエ、1万円札を数えている。

オガワ、それを見ている。

ナナシとムメイは舞台下に降りて、客席内を歩いている。

クロエ、25万円をオガワに渡す。

クロエ 「どうだ？」

オガワ 「どうだつて？」

クロエ 「千円が今日一日で、諸々、飲食費、経費を差し引いても50万になった……」

オガワ 「ついてたな」

クロエ 「ついてた？バカ言え、ギャンブルはツキでやるもんじゃない」

オガワ 「じゃあ？」

クロエ 「ギャンブルは、いつだって実力勝負。弛まぬ研究と、強靱な精神力、そして、鋭敏な勝負勘をフルに活動させてするものだ」

オガワ 「勝負勘って、やっぱりツキに頼る部分もあるってことじゃないのか？」

クロエ 「やかましい！これ（札を示して）がオレの実力だ！わかったか！」

オガワ 「ああ……すごいよ」

クロエ 「よし。じゃあ、端数はオレが貰っておく」

オガワ 「千円出したのはオレじゃないか」

クロエ 「たしかに千円出したのはおまえだ。だが、レースを予想して馬券を買ったのはオレだ」

オガワ 「それはそうだけど……」

クロエ 「おまえが、ただボケーっと千円持ってたって、なんか食ったらそれでおしまい。それをオレの力で、今月暮らせるくらいに金にしてやったんだぞ。本当は、オレが40万でおまえが10万でもいいとこだ。それとも千円だけ返そうか？利子つけてやるぞ、トイチで百円」

オガワ 「……」

クロエ 「安心しろ。オレも鬼じゃねえ。相棒とは、いつも山分けてことにしてるんだ」

オガワ 「相棒……」

クロエ 「ああ、そつだ。おまえはオレの相棒だ」

オガワ 「でも、昨日会ったばかりじゃないか」

クロエ 「どんな親友だって、初対面の日はある。ジョン・レノンとポール・マッカートニーは、1956年6月15日にリバプールのウールントン教会で、運命的に出会ったんだけどな」

オガワ 「だから？」

クロエ 「オレとおまえも、運命的に出会ったってことだ」

オガワ 「留置場でね」

クロエ 「その前にバーで会ってるじゃねえか」

オガワ 「バーでは一言も話してない。あんたは暴力ふるって、オレは巻き添えになって捕まっただけだ」

クロエ 「助太刀してやったんじゃないか」

オガワ 「あんた、よくあやつって他人の話にクビを突っ込んで、揉め事起こすの？」

クロエ 「オレは、権力者が嫌いだな」

オガワ 「権力者？あの人はただの画商だよ」

クロエ 「いや、権力者だ。おまえとの地位のギャップを使って、おまえをイジメた。あれは、パワーハラスメントだ」

オガワ 「(笑う)」

クロエ 「何がおかしい？」

オガワ 「だって……サーモンハラスくらいしか縁がなさそうなのに」

クロエ 「たしかにサーモンハラスは好きだ。芋焼酎があればさらにいい」

オガワ 「焼酎好きなのか？」

クロエ 「アルコールならなんでもいい」

オガワ 「そんな感じだな」

クロエ 「どんなドラッグよりアルコールだ。だからこそ、いつの時代だって、人間社会からアルコールを完全に締め出すことはできない」

オガワ 「アルコールだって、飲み過ぎは危険だ」

クロエ 「そんな経験あるのか？」

オガワ 「……思い出したくない」

クロエ 「へえ……ま、オレの場合、飲み過ぎたら記憶なくなって、思い出したくてもできないけどな」

オガワ 「不安にならないのか？」

クロエ 「何が？」

オガワ 「思い出せないこと」

クロエ 「自分が覚えていようがなかるうが、やったことはやったこと、やってないことはやってない。それだけさ。事実とか真実なんて、人の数だけあるんだ。気にしても仕方ない」

オガワ 「楽観的なんだな」

クロエ 「おまえが悲観的だけじゃないのか？自分のやったことを後悔するくらいなら、はじめから何もしない方がいい」

オガワ 「……」

クロエ 「それとも、悲観的じゃないなら、プライドが高過ぎるんだな」

オガワ 「え？」

クロエ 「いい、いい、気にすんな」

オガワ 「……」

クロエ 「ああ、デカイ勝負がしてえなあ。頭が痺れるような」

オガワ 「あんた、仕事は？」

クロエ 「仕事っていうのは、金を掴むための労働のことか？」

オガワ 「他に何かある？」

クロエ 「金にならない仕事はいくらでもあるだろ。たとえばおまえの絵だ」

オガワ 「……」

クロエ 「金稼ぎたいなら、絵なんかやめて、まっとうに働いた方がいい。おまえの絵が売れる保証なんてないんだからな」

オガワ 「……」

クロエ 「今この国で、本当の意味で路頭に迷うなんてことは、よほどわがままを言わない限りあり得ない。選り好みさえしなければ、仕事はいくらでも転がってる」

オガワ 「あんたは何をしてるんだ？」

クロエ 「ギャンブル全般だ」

オガワ 「つまり……ギャンブラーってことか？」

クロエ 「ああそうだ」

オガワ 「そんな風に言い切って、恥ずかしくない？」

クロエ 「何が？」

オガワ 「何が……要するに、いい年して定職にもつかず、ふらふらしてるってことだろ」

クロエ 「おまえも同じだろ」

オガワ 「オレは……」

クロエ 「芸術家だから許される？それは職業差別だ」

オガワ 「……」

クロエ 「だいたい、ギャンブルは人間の本性に合った、立派な職業なんだ」

オガワ 「どこが？」

クロエ 「人間には、射幸心というものがある。お上は、射幸心を煽ることはイカン、などと寝言ほざいているようだが、射幸心があればこそ人間は努力もするんだ」

オガワ 「そうかな？努力とか地道に働くのがイヤだから、一発当ててやろうとするんじゃないのか？それに勝ってるうちはいいいけど、ギャンブルははずれ負けるときが来る。そうしたらどうするんだ？」

クロエ 「必勝法がある」

オガワ 「必勝法？」

クロエ 「ああ、そうだ。それさえ守れば、絶対に勝てる」

オガワ 「そんなものあるわけないだろ」

クロエ 「いや、それがあるんだな」

オガワ 「もしそんな方法があるなら、誰も負けないってことだろ。でも、そんなことはあり得ない。ギャンブルだけじゃなくて、人生でもなんでも、すべてはゼロサム・ゲームなんだからさ」

クロエ 「なんだ、ゼロサムって？」

オガワ 「全員の勝ち負けを合わせると、常にゼロになるってこと」

クロエ 「引き分けてることか？」

オガワ 「引き分けじゃないよ。勝つヤツがいたら、負けるヤツがいるってこと」

クロエ 「当たり前じゃねえか」

オガワ 「だから、もしギャンブルに必勝法があつて、それを全員が知ってしまったら、全員が勝つわけだけど、実際にはそんなことは起こりえない。つまり、必勝法なんてないんだよ」

クロエ 「難しい言い方するな」

オガワ 「それほど難しくもないだろ」

クロエ 「おまえの言い方の問題だ」

オガワ 「え……」

クロエ 「いいか、必勝法はある。でも、誰もが知ってるわけじゃないし、知ったからといって、誰もが実行できるものでもない。だから、負けるヤツが必ず出る。わかったか」

オガワ 「誰もが実行できないって、その必勝法、そんなに難易度高いのか？」

クロエ 「ほら、まただ」

オガワ 「何が？」

クロエ 「なんで、わざわざ『難易度高い』とか言うんだ？難しいのかって言えばいいだろ」

オガワ 「ああ……ごめん」

クロエ 「まあ、いい。今後気をつけろ」

オガワ 「じゃあ、そんなに難しいのか？」

クロエ 「何が？」

オガワ 「必勝法を実行すること」

クロエ 「そうだな、たいていのヤツは、それが本当に必勝法なのか信じられなくなつて、負け込んだままオリちまう」

オガワ 「そうかな？負け込めば負け込むほど、その必勝法にすがりつくんじゃないかな」

クロエ 「ギャンブラーのほとんどは、勝ち金を楽に早く欲しがる。それは、性格や考えによるんじゃないかと、怠け者の人間としての本性だ。株や投資なんか、本来長い期間で収益を期待すべきものなのに、ほとんどのヤツが短期間でデカイ収益を上げようとする。で、こける」

オガワ 「あんた、株もやるのか？」

クロエ 「株だつてギャンブルだからな。でも、今はまだ準備中だ。株で勝負するには、デカイ金がある」

オガワ 「ふうん、貯金してるんだ」

クロエ 「貯金なんかするか」

オガワ 「どうして？」

クロエ 「金は常に動かさないといけないんだ。貯金なんかしないで、どんどん使わないと本当の意味で増えやしない」

オガワ 「そんなもんかな」

クロエ 「ちよつと考えればわかるだろ。たとえば、百万を5年の定期預金に入れても、5年後に利息は4万くらいだぞ。だけど、鉄板本命の複勝に百万突っ込めば、1・1倍だったとしても、その日のうちに十万になるんだぞ」

オガワ 「うん、詭弁のような気がするけど、反論できない……」

クロエ 「正論だからだ。で、話を戻すと、怠け者は必勝法を実行できない。実行できるのは、怠け者としての本性を制御できるヤツ。そいつに、より大きな勝ち分が与えられるように、この世の中では

きてる」

オガワ 「本当に必勝法なのか？」

クロエ 「ああ。オレを見る、こうして立派に生きてるだろ」

オガワ 「立派にねえ……じゃあ、オレにも教えてくれよ。二人でやれば、勝ち分も2倍になるし」

クロエ 「ダメだ」

オガワ 「ダメ？」

クロエ 「簡単には教えられない」

オガワ 「オレ、あんたの相棒なんだろう？」

クロエ 「相棒でもダメだ」

オガワ 「あんたは、相棒を信じてないのか？」

クロエ 「相棒はいつか必ず裏切る。これはいつの世の中でも真理だ。赤の他人は、元々関係ないから裏切られたりもしない。でも、相棒はなまじ関係が深いために、いったん関係がこじれたら、必ず裏切る。だから、一番警戒しなきゃいけないのは、赤の他人じゃなくて相棒なんだ」

オガワ 「意外と心狭いんだな」

クロエ 「慎重なんだ」

オガワ 「似合わない」

クロエ 「何とでも言え」

オガワ 「どうしたら教えてくれるんだ？」

クロエ 「そうだな、おまえを本当に信用できて、なおかつ、オレたちが別々に生きることを決めたときだな」

オガワ 「オレは、いますぐにでも別々に生きて構わないけど」

クロエ 「でも、オレはまだおまえを信用してない」

オガワ 「勝手に他人の部屋に泊まり込んでるヤツに言われたくないなあ」

クロエ 「オレは、ずっと警戒しながらここにいるんだ」

オガワ 「知らなかった」

クロエ 「いつ、おまえが、オレの有り金狙って、襲いかかって来ないとも限らないからな」

オガワ 「じゃあ、どうしても教えてくれないんだな」

クロエ 「ああ、ダメだ」

オガワ 「ま、いいや……でも、今日は楽しかったよ。オレ、初めてなんだ、実際に競馬場行っただの」

クロエ 「そうか。そりゃよかった」

オガワ 「明日も行くかな」

クロエ 「そうしろ、そうしろ」

オガワ 「あんたも行く？」

クロエ 「もちろん。職場だからな」

オガワ 「明日は、自分でも買ってみようかな」

クロエ 「そうだな、ギャンブルは実戦で鍛えるしか上達の道はないからな。今日の勝ち分は、授業料だと思っただけ、全部突っ込むくらいじゃあ、覚悟でいけ」

オガワ 「でも、最初はちよっとずつの方が……」

クロエ 「そんなんじゃ、いつまでもアマチュアの域から出られないぞ」

オガワ 「オレ、一生アマチュアでいいんだけど」

クロエ 「そうか。じゃ、好きにしろ」

オガワ 「うん」

クロエ 「なんか、ノド渴いたな」

オガワ 「ビールでも飲むか？」

クロエ 「お、いいねえ。今日の勝利と明日の勝利のために祝杯をあげるとするか！取ってくる」

オガワ 「冷蔵庫に入ってる」

クロエ 「了解！」

クロエ、花道から去る。

照明が変化する。

ナナシとムメイ、ヒモと箱の位置を変える。

ナナシ、オガワの隣の箱にすわる。

クロエ、ビールを持って戻ってきて、花道に残された箱にすわる。

#2

舞台はバーに変わる。

店内ノイズ。

バーボンのボトルが置かれている。

オガワ、会話の間、ショットグラスでバーボンをストレートで何杯も飲む。

ナナシ 「だから、もうオガワさんに投資するわけにはいかない、と言ってるじゃないですか」

オガワ 「どうして？」

ナナシ 「どうして？売れないからに決まってるでしょ」

オガワ 「……」

ナナシ 「デビュー当時は勢いあつたんですけどねえ。出す展覧会、出す展覧会で賞をもらって、あつという間に大賞まで取っちゃって……評論家受けもよかつたし、いけると思ったんですがねえ。それがどうして……」

オガワ 「……」

ナナシ 「黒い絵、えとタイトルは何でしたっけ？何度聞いても覚えられないんだ」

オガワ 「ヒムス」

ナナシ 「え？」

オガワ 「ヒムス。H・M・N・N・S、ヒムス。賛美歌の意味です」

*この二行を何回かリピートする。

ナナシ 「ああ、そうヒムスね。読めないタイトル付けちゃダメですよ。それだけで、警戒する人もいる」
オガワ 「警戒？」

ナナシ 「難しいアートじゃないかってね。賛美歌の意味なら、タイトルも『賛美歌』でいいじゃないですか」
オガワ 「難しいとなんでマズインですか？」

ナナシ 「基本的にわからないものは嫌いな人が多いでしょ。で、嫌いなものにお金払う人は、まあ、滅多にいない」

オガワ 「……」

ナナシ 「あの絵はいいんですよ、あれで。オガワさんの名前も、あれで知られるようになったわけですから。まず、名前を出すというのは、とても重要なことです。でも、今まで何度も申し上げたように、あの手の絵は、ニーズが限られてるんです。暗い、わかりにくい、主張が強すぎる……」

オガワ 「でも、芸術作品は、その時代における不安や絶望を形にきたじゃないですか」

ナナシ 「何難しいこと言ってるんです？いいですか、多くの美術愛好家が求めている絵は、わかりやすく、誰もがいい絵ですね、きれいな絵ですね、と言えるような絵なんです」

オガワ 「……」

ナナシ 「絵を飾るっていうのは、ちょっとした贅沢なんです。求められているのは、無味乾燥な日常に、それこそ色を与えるものなんです。絵を飾る人たちは、芸術的な雰囲気してほしいのであって、魂の叫びとかその時代における社会的、精神的な不安なんかが込められた芸術作品はいららないんです。そういうのは、美術館や展覧会で見ればいい」

オガワ 「だけど……」

ナナシ 「『ゲルニカ』の本物がリビングにかかってたらどう思います？毎日、ピカソの怒りや戦争の悲惨さが、食卓の雰囲気を台無しにするんですよ」

オガワ 「……」

ナナシ 「『ゲルニカ』より、きれいな花の絵の方が喜ばれるんです。わかりますよね？」

オガワ 「言われてることはわかります。でも……」

ナナシ 「でも？」

オガワ 「そういう絵は僕が描かなくても……」

ナナシ 「オガワさんが描くから値段もついたのでしょ」

オガワ 「……」

ナナシ 「その辺の日曜画家が描いても、商売になりません。きちんとした美術展で大賞を取り、評論家にも支持された画家の絵だからこそ、価値があるんです。で、そういう絵で稼いで、本当に描きたい絵に全力を傾ければいいじゃないですか。よっぽどの大家にならないかぎり、みんなそうやって自分の本当に描きたい絵を守っているんですよ」

オガワ 「……」

ナナシ 「実際、最近のオガワさんの黒い絵にしたって、絵の具代をケチってるから、以前のような迫力ありませんよね。しかも、どんどん小さくなって」

オガワ 「……」

ナナシ 「あ、失礼。言い過ぎましたね」

オガワ 「いえ、それは事実ですから……だから、こうやってお願いしてるんです。以前のように、援助していただけませんか」

ナナシ 「まともな絵も描いてくれれば、またいくらでも応援させてもらいますよ」

オガワ 「まともな絵って？」

ナナシ 「まずは、大きい絵ですね」

オガワ 「いい絵と大きさは関係ないじゃないですか」

ナナシ 「いやいや、小さい絵はダメだ。1号いくらで、値段が決まるんだから」

オガワ 「『モナリザ』は、思ったより全然小さいですよ……」

ナナシ 「ダヴィンチなら大きさは関係ないですよ、ダヴィンチなら。でも、オガワさんはダヴィンチじゃない、オガワさんだ」

オガワ 「……」

ナナシ 「でも、オガワさんはダヴィンチじゃない、オガワさんだ」×5

オガワ 「……」

ナナシ 「それに、個人向けの絵じゃ基本的に買い手にも限界がある。やっぱり、企業や公的機関が欲しいが

のような大きさがないとねえ。大きい壁に掛けられる絵がいい絵なんです。それもホールのエン
トランスとか、会社の受付とか社長室とかの壁にね。権力者は、いや、権力は、なぜか大きいも
のを求めるんです」

オガワ 「どうしてですか？」

ナナシ 「人は大きさに支配されることを無意識に求めている。宗教や権力、権力者は、それを利用してい
るんですよ」

オガワ 「……」

ナナシ 「それから、人物描いてください」

オガワ 「人物は描いてる……」

ナナシ 「え？見たことないなあ」

オガワ 「ヒムスだって、人物を描いたんです」

ナナシ 「え？誰を？教えてくださいよ」

オガワ 「いや……キャンバスを黒く塗っただけです」

ナナシ 「でしょ。とにかく、肖像画じゃなくても、人物が描かれている方が値段もつくんです。もちろん、
肖像画を描いてくださるなら、ニーズはいくらでもありますからね。ご紹介できますよ」

オガワ 「肖像画はやりたくないんです」

ナナシ 「どうして？芸術には何らかのパトロンが必要だ。芸術には金がかかりますからね。現に、オガワ
さん、絵の具代があるんですよ。絵の具は、金があれば買える。その出どころが、国家でも、個人
コレクターのなければなしの金でも変わらない」

オガワ 「……」

ナナシ 「それに、どんな芸術家でも、作品で日々の糧を得るかぎりにおいて、作品を売らなければならな
い。それでもできれば好条件で」

オガワ 「でも、肖像画は……」

ナナシ 「肖像画のどこがイヤなんです？」

オガワ 「注文つけられますよね」

ナナシ 「そりゃ、ある程度はニーズには応えないと」

オガワ 「できればそういうことはしたくないんです」

ナナシ 「いったん何らかの代価を提示され、その依頼に応えるかたちで制作されたとき、そこには何らかの制限がつけられる……これは芸術だけじゃなくて、社会で生きる人間にとって、当然のことですよ。みんなやりたくない仕事もして、生活費稼いでいるんです。芸術家だから特別だつてことはない。まずは生活しないと」

オガワ 「つまり、商売に力を入れていることですね……」

ナナシ 「はあ？何寝とぼけたこと言ってるんですか？私は画商ですよ。商いって名乗ってるんだから、商売に決まってるでしょ。絵が売れなきゃ、潰れるんですよ。家賃だけで月にどれくらい払わなきゃならないと思ってるんです？」

オガワ 「……」

ナナシ 「それとも私のことボランティアだとも思っていました？」

オガワ 「いえ……」

ナナシ 「あ、そうそう、それと、抽象画でもスーパーリアルでもいいから、具体的に色彩の明るい絵描いてくださいよ。ゴッホの精神は病んでるけど、画面は明るいでしょ。だから、高い値つくんです」

オガワ 「ゴッホの『開かれた聖書のある静物』は黒い絵だけど……」

ナナシ 「そりゃオガワさんもゴッホになつてくれればいいですよ」

オガワ 「……」

ナナシ 「でも、オガワさんはゴッホじゃない」*リピート

ナナシ 「別に、絵の芸術性で勝負しなくても結構です。来年あたり、壮絶に死んでいただければね。早死には、なぜかこの業界で受けますからねえ」

オガワ 「……」

ナナシ 「来年、壮絶に死んでいただけるなら、絵の具代、いくらでも融資しますよ。で、1年で描けるだけ描いてください。黒い絵でも構いません。きっと高値がつきますから」

オガワ 「……」

ナナシ 「どうです？そうすれば、オガワさんの名前も残るんだし」

オガワ 「……」

ナナシ 「デュシャンが芸術つてものをひっくり返してから、芸術家にテクニックは不要になりましたからね。芸術家は、生き方が問われてるわけですよ。特に死に方ね」

オガワ 「……」

ナナシ 「冗談ですよ、冗談。ま、売れる絵描いていただければ、いくらでも扱わせてもらいますよ。でも、もう売れる絵描く気力ないか。それなりにエネルギー必要ですよんね」

オガワ 「……」

ナナシ 「それに、オガワさん、こっちの要求に全然応えてくれないし。どんな絵頼んでも、真っ黒に塗りたくった絵ばかり持つてる。そりゃ、あれだけ塗れば絵の具代はかかっているかもしれないけど、売れないの、あんなのは」

オガワ 「あんなの……」

ナナシ 「あ、失礼。深い意味はないですから。売れないって意味だけで」

オガワ 「……」

ナナシ 「それから、これはご忠告なんです」

オガワ 「え……？」

ナナシ 「お酒、控えられた方がいいんじゃないですか」

オガワ 「……」

ナナシ 「いろんなところで噂聞きますよ」

オガワ 「どんな？」

ナナシ 「いろいろです」

オガワ 「……」

ナナシ 「でも、僭越ながら私が思うには、もう少し売れる絵を描いて、金銭的に安心できるようにすれば、そういうことも減るんじゃないですかね。要するに、売れてないことが、ストレスになって、それをお酒で発散させてるように私なんかは感じちゃうんですがね。違います？」

オガワ 「……」

ナナシ 「ね、だから、売れる絵描きましようよ。オガワさんは、そういうこともできる人なんだから。依頼を受けて絵を描くことは、恥でもなんでもないんですよ。実際、あの「ゲルニカ」だって、パリ万博のために、ピカソ自身が毛嫌いしていた右翼の親玉で独裁者の、フランコ將軍に依頼されて描かれたものなんです。まあ、依頼されて、ああいう絵を描けることが、すごいわけですが」

オガワ 「……」

ナナシ 「とにかく、どんな芸術だって、値段がつくかぎりにおいて、商業の末端にいるわけですから、そこは考え方しだいで、売れる絵を描いたって、何の問題もないんじゃないですか？」

クロエ、二人の会話に首を突っ込んでくる。

クロエ 「うるせえな、おまえ」

ナナシ 「え？」

クロエ 「売れる絵、売れる絵って、バカの一つ覚えじゃあるまいし」

ナナシ 「どなたですか？」

クロエ 「誰だっていいだろ」

ナナシ 「(オガワに) お知り合い？」

オガワ 「いや……」

ナナシ 「なんだ、酔っ払いか……すみませんが、ご自分の席に戻っていただけませんか？」

クロエ 「やだ」

ナナシ 「は？」

クロエ 「やだ」

ナナシ 「やだって言われても、ねえ」

クロエ 「おまえ、今、オレのこと笑ったろ」

ナナシ 「笑ってませんよ」

クロエ 「いや、笑った。オレはおまえなんかに笑われる覚えはない。謝れ」

ナナシ 「まいったな、因縁つけられちゃった」

クロエ 「謝れ」

ナナシ 「(オガワに)なんだ、こいつ?」
クロエ 「こいつ?」

クロエ、いきなりナナシの胸ぐらをつかむ。

ナナシ 「(オガワに向かって) 殴る気か?」

オガワ 「……」

ナナシ 「殴るなら、殴ってみろ!すぐに警察呼んでやる」

クロエ 「上等だ、この野郎!」

クロエ、オガワを突き飛ばし、再び、ナナシの胸ぐらをつかむ。
ノイズ。

#3

オガワの部屋。

クロエ 「なんで黒い絵を描いたんだ?」

オガワ 「なんでって……」

クロエ 「ストーンズが好きとか?」

オガワ 「何それ?」

クロエ 「ローリング・ストーンズだよ。『黒く塗りつぶせ』って名曲があるだろ」

オガワ 「知らない」

クロエ 「聞いたことないのか?」

オガワ 「ない」

クロエ 「じゃあ、なんで?」

オガワ 「理由なんかない……」

クロエ 「あ、そう。じゃあ聞かない」

クロエ、花道から出て行くこととする。

オガワ 「どこ行くんのだ?」

クロエ 「便所」

クロエ、花道から去る。

ムメイ、舞台上に上がってくる。

ムメイ 「なんで、あんなヤツを家に連れて来たんだ?」

オガワ 「行くところないらしい」

ムメイ 「画商が訴えを取り下げてくれなかったら、犯罪者なんだぞ、あいつ」

オガワ 「口は悪いけど、悪い人間じゃないと思うんだ」

ムメイ 「悪い人間じゃないヤツが、いきなり見ず知らずの人間を殴り倒すか？」

オガワ 「あのときは酔ってたし……」

ムメイ 「酔ってれば、何してもいいのか？」

オガワ 「そうは言っていないだろう……」

ムメイ 「だいたい、日本人は酒に弱すぎるし、甘すぎる。飲酒運転は、どうしてなくならないんだ？どこかで、酒飲むことはいいことだ、って思ってるからだ」

オガワ 「おまえも日本人だろう。よその国のことみたいに言うなよ」

ムメイ 「オレは国籍は日本人だが、生物学的にはフランス人の血が勝ってる」

オガワ 「へえ、ハーフでもそんなことあるんだ。クォーターとかなら、まだわかるけどな。何か科学的な根拠とかあるのか？」

ムメイ 「どうでもいいだろう、そんなこと。今、問題なのは、ああいうヘンなヤツを家の中に入れてることだ。画商にも誤解される」

オガワ 「別に誤解されてもいいさ。オレの絵も誤解してるんだし」

ムメイ、携帯電話の着信音を口で言う。それから電話に出て何か喋り、電話を切る。

ムメイ 「なあ、ちゃんと謝って、また絵を扱ってもらえるようにした方がいいんじゃないか？なんかんや言って、昔から応援してくれてるんだし」

オガワ 「応援なんかじゃない。商売だ。自分が儲けることしか考えてないんだ」

ムメイ 「……今でも、黒い絵を描いているのか？」

オガワ 「いや……見るだけだ」

ムメイ 「見る？何で？」

オガワ 「作品とは、自分自身を映す鏡なんだ」

ムメイ 「鏡ねえ……真つ黒な鏡じゃ何も映らないだろう」

オガワ 「おまえに理解してもらわなくてもいい」

ムメイ 「誰かに理解してもらいたいから描いたんじゃないのか？」

オガワ 「……」

ムメイ 「おまえ、黒い絵が、自分のオリジナリティだとも思っていないか？」

オガワ 「オリジナリティ？」

ムメイ 「そう」

オガワ 「そんなことを考えたことは一度もない」

ムメイ 「一度も？」

オガワ 「ああ。オリジナリティなんて、そんなに大切なものか？だいたい、モダニストたちのオリジナリティ至上主義が、芸術をダメにしたんだ……」

ムメイ、携帯電話の着信音を口で言う。それから電話に出て何か喋り、電話を切る。

ムメイ 「で？」
オガワ 「芸術家の多くは、進歩や成熟、オリジナリティといったものをはや信じられなくなっている」
ムメイ 「おまえが大賞取ったの、いくつときだったけ？」
オガワ 「21」
ムメイ 「10年前か……もう若さは売りにできないな」
オガワ 「どういう意味だ？」
ムメイ 「いや、あつという間に時間は過ぎるもんだなあつてさ」

間。

オガワ 「仕事は順調なのか？」
ムメイ 「ああ。そこそこ売れてるアーティストを何人か面倒みてる」
オガワ 「自分じゃ、もう絵は描いてないんだ」
ムメイ 「ああ、やめた。おまえと違って、女房も子供もいるから、金稼がなくちゃならない」
オガワ 「オレのマネージャーなんかやらせて悪かったな」

ムメイ、携帯電話の着信音を口で言う。それから電話に出て何か喋り、電話を切る。

オガワ 「電源切れよ」
ムメイ 「ああ、そうだな……息子も絵が好きでさ、絵画教室に通ってる」
オガワ 「へえ……元氣か？」
ムメイ 「おかげさまで」
オガワ 「もう小学校か？」
ムメイ 「ああ……でも、とにかく、子供を育てるっていうのは、金がかかる」
オガワ 「でも、どこの親だつてやってることじゃないか」
ムメイ 「だからこそ、親はありがたいんだよ。それがやつとわかってきた」
オガワ 「ふうん」
ムメイ 「おまえはいいよな、責任なくて」
オガワ 「そんなことないさ」
ムメイ 「この国は、芸術家には住みづらい。フランスじゃ、もっと国の援助があるのになあ……なんで日本国籍選んじやっただろう。大失敗だった」
オガワ 「オレは、国にどうにかしてもらおうなんて思っちゃいない。絵を描くっていうのは、いつだって個人の問題だ。おまえも国のせいとかにしない方がいい」
ムメイ 「おまえに説教されるとはな。身元引受人はおれだぞ」
オガワ 「……」
ムメイ 「それにしても、おまえのオフクロさんから、警察に行ってくれ、って電話もらって、ほんとに驚いたよ。ついにやったかと思っただ」
オガワ 「……」

ムメイ 「でも、加害者じゃなくて、よかったよ、本当に」
オガワ 「面倒かけた。すまない」

ムメイ 「ま、友人として、やるべきことをやったまでだ。だから、あえて言わせてもらう。オフクロさんにあんまり心配をかけるな」

オガワ 「ああ」
ムメイ 「この前、オヤジのところに子供連れて行ったんだけど、そのとき偶然、おまえのオフクロさんに会ってな——いろいろ泣きつかれたよ」

オガワ 「……」
ムメイ 「おまえ、オフクロさんに、相当借金してるらしいじゃないか」

オガワ 「遺産相続の前借りだ」
ムメイ 「遺産？どこにそんなもんあるんだ？」

オガワ 「あつたんだよ」
ムメイ 「うそつけ。うちもおまえんちも、似たようなもんじゃないか」

オガワ 「……」
ムメイ 「オフクロさんだって、いい加減にしてほしいって思ってるに決まってる。またパートで働き始めたって言うてたから」

オガワ 「他人の家のことに口を出すな」
ムメイ 「そうはいかない。オレも、おまえのオフクロさんにはいろいろ世話になったからな、オフクロさんが気の毒な目に遭うのは我慢できない」

オガワ 「おまえに言われなくなつてわかつてるよ！ただ、今はどうにもならないんだ……」
ムメイ 「仕事はしてるのか？」

オガワ 「絵は描いてる」
ムメイ 「オレが言ってるのは、金をもらえる仕事のことだ」

オガワ 「生きていけるくらいの金は稼いでいる」
ムメイ 「そういう問題じゃないだろ。少しは家に金入ってるのか？」

オガワ 「おまえに関係ないことだろ」
ムメイ 「おまえが心配なんだよ」

オガワ 「どうして？」
ムメイ 「友だちだと思ってるからさ」

オガワ 「……」
ムメイ 「彼女とも別れたんだって？」

オガワ 「ああ……」
ムメイ 「原因は何だ？」

オガワ 「いろいろ。いつだって、別れる理由なんて一つじゃないだろ」
ムメイ 「また飲んで暴れたのか？」

オガワ 「……」
ムメイ 「酒、やめた方がいいぞ」

オガワ 「ああ」
ムメイ 「そのうち、おまえの周りから誰もいなくなる」

オガワ 「わかってる」

ムメイ 「じゃあ、何で飲むんだ？いや、飲むのはいい。飲んで暴れなければな」

オガワ 「暴れてはいない……」

ムメイ 「あれは暴力だよ。言葉の暴力」

オガワ 「……」

ムメイ 「あんな風に誰かを傷つけて面白いのか？」

オガワ 「傷つけてるつもりはない。いつだって思ったことを言っただけだ」

ムメイ 「でも、相手は、実際、傷ついてる」

オガワ 「……」

ムメイ 「いいか、言葉はそれを言った人間には何の意味もない。いつだって、それを言われた人間の方に意味があるんだ。だからこそ、大切な人に話す時には、言葉を選ばなくてはならない」

オガワ 「自分の気持ちを偽ってもか？」

ムメイ 「ああ、そうだ」

オガワ 「で、嘘で塗り固めた世界にはまり込んで抜け出せなくなる」

ムメイ 「そんなことはない」

オガワ 「友だちの女を寝取ったヤツに言われたくないな！」

ムメイ 「……やっぱり、まだこだわってたのか」

オガワ 「……」

ムメイ 「だがな、オレはやましいことは何もしてない。あいつは、おまえに疲れ果てていたんだ」

オガワ 「……」

ムメイ 「おまえ、あいつに何をした？」

オガワ 「何もしちゃいない」

ムメイ 「そう、何もしてない。でも、付き合ってる女に何もしないってのは、どうなんだ？」

オガワ 「……」

ムメイ 「最初あいつは、たしかにおまえのことを愛していたかもしれない。でも、それはいつまでたっても一方通行だ。そんな状況に女がいつまでも甘んじてると思うか？女つてのは男よりよっぽど現実的なんだ。おまえには一生わからないかもしれないけどな」

オガワ 「……」

ムメイ 「オレは、そんなあいつを愛しただけだ……寝取ったわけじゃない」

オガワ 「もう、帰ってくれ……」

ムメイ 「あの絵……黒く塗りつぶす前、何を描いたんだ？」

オガワ 「(笑う)」

ムメイ 「何がおかしい？」

オガワ 「自分を主人公にして、話をドラマチックにしたいのかもしれないけど、おまえの考えているものとは違う」

ムメイ 「……」

オガワ 「ま、おまえがそう思ってあの絵を見るのは勝手だけだな。絵は、それを見る人間の数だけ物語があるものだ」

ムメイ 「……」

オガワ 「安心しろ。オレが描くのは、いつでも自分自身だ」
ムメイ 「……そうか」
オガワ 「帰ってくれ」
ムメイ 「無茶はするなよ」
オガワ 「……」

ムメイ、花道から去る。

音楽。

オガワ、自分の世界に深く入り込む。

4

クロエ、ポケット瓶のウイスキーを飲みながら、花道から戻ってくる。
オガワ、クロエが戻ってきたことに反応しない。

クロエ 「おい」

オガワ 「……」

クロエ 「おい！」

オガワ 「え……ああ……」

クロエ 「おまえさ、誰かといるときには、自分の中に籠もるなよ」

オガワ 「ごめん……」

クロエ 「おまえ、過去にこだわるタイプだろ」

オガワ 「……過去と決別したいんだ」

クロエ 「何かっこつけてんだよ。要するにイヤな思い出を忘れたいってただけだろ？だから、絵を真っ黒に塗り潰したんだ」

オガワ 「ちがう……」

クロエ 「どう違うんだ？」

オガワ 「あれは、純粹な表現衝動から……」

クロエ 「何が純粹な表現衝動だ。描いた絵が気に入らないから、何度も何度も塗り直しているうちに、それが面白くなっちゃっただけだろ」

オガワ 「そんな風に言うなよ」

クロエ 「でも、その外れでもないんじゃないか？」

オガワ 「的外れだよ」

クロエ 「そうか？本当は失敗作だったのに、周りの人間が妙に勘違いして誉めるもんだから、後付でいろいろ意味を考えて、それを表現衝動だと思込もうとしてるだけなんじゃないのか？」

オガワ 「そんなわけないだろ」

クロエ 「へえ。じゃあ、おまえにとって黒い絵は何なんだ？」

オガワ 「まず、前提として……」

クロエ 「前提なんてどうだっていい。核心を話せ」
オガワ 「少しはオレにも喋らせろよ。あんたのやり方は、誘導尋問みたいだ。自分の聞きたいことだけ話させようとしてるんだ」

クロエ 「そうか？それは悪かったな。じゃあ、前提から聞こうじゃないか」

オガワ 「……まず、前提として、オレにとつて絵は、自分が自分であるための装置なんだ」

クロエ 「何かで読んだのを丸暗記か？」

オガワ 「ほら、また邪魔する」

クロエ 「まじろっこしいんだよ、おまえの話は」

オガワ 「じゃあ、もういい」

クロエ 「お、今度はディスコミュニケーションか？」

オガワ 「なんで、そんなに絡むんだよ」

クロエ 「ムカつくの。世界中の悲劇を一身に受けているような顔しやがって」

オガワ 「……」

クロエ 「おまえ、本当は、黒い絵に縛られてるんだろ？」

オガワ 「なんだと！」

クロエ 「だから、難しい言い方するんだ。何とか正当化しようと思って」

オガワ 「あんたに何がわかる！」

クロエ 「オレの知る限り、人は自分の過去を正当化したがる。で、習慣を直そうとしない。だから同じことをくり返す。黒い絵を描き続ける」

オガワ 「いい加減にしないと怒るぞ」

クロエ 「描きたいものがあつたら描けばいいし、それが売れようが売れなからうが関係ない。誰かに誉められなくたって、自分が納得できればそれでいいはずだろ？」

オガワ 「そんな簡単なことなら、世界中の芸術家は誰も苦悩したりしない」

クロエ 「苦悩しなければいいじゃないか」

オガワ 「は？」

クロエ 「何で苦悩なんかするんだ？苦悩しないと芸術家っぽくないからか？」

オガワ 「……」

クロエ 「ああ、好きな絵が描けて、僕って最高にハッピー！ってのじゃいけないのか？しかも、それを買ってくれる人がいるなんて、なんて恵まれてるんだらう。神さまありがとぅ！」

オガワ、脱力する。

クロエ 「どうした？」

オガワ 「……あんたにはかなわないよ」

クロエ 「何が？」

オガワ 「ほんとは、オレもそう思っていたのかもしれない」

クロエ 「じゃあ、そうすればいい」

オガワ 「でも、本当に絵を描くっていうのは、そういうことじゃない」

クロエ 「ほう」

オガワ 「オレの望みは、自分の見てる世界を、見えた通りに描きたいんだ」

クロエ 「じゃあ、そうすればいい」

オガワ 「だけど、それが簡単にはできない。そこで、悩む……」

クロエ 「面倒くせえなあ」

オガワ 「ああ、本当に面倒くさい。始めなければよかったって思うときもある」

クロエ 「バカ言え。おまえは絵を描き続ける」

オガワ 「どうして？あんたの相棒として、ギャンプラーになってもいいかなって思ったりもしたんだけど」

クロエ 「それも悪くないけど、オレはおまえの黒い絵が好きだ」

オガワ 「え、ほんとに？」

クロエ 「ああ」

オガワ 「どうして？」

クロエ 「どうしてって……ああ、こういう風に世界が見えてるのは、オレだけじゃないんだなって思えて安くなるからかな」

オガワ 「ほんとに？」

クロエ 「ああ……」

オガワ、ポケット瓶を受け取り、飲む。

クロエ 「おまえのゴールは何だ？」

オガワ 「ゴール？」

クロエ 「どんなスポーツにもゴールがある。ゴールのないマラソンがあつたら人はあんなに早く走れない。ゴールの決まってるサッカーでは、ゲームにならない。単純に言えば、人は目標を決めなければ、常に見当違いのことをしてしまう」

オガワ 「……」

クロエ 「おまえは、ゴールがわかってないんじゃないのか？だから、見当違いのことばかりしてる」

オガワ 「あんたはわかってるのか？」

クロエ 「もちろん」

オガワ 「教えてくれよ」

クロエ 「いやだ。自分以外の人間に教えるようなことじゃない。いや、誰かに教えたら、それはもうゴールじゃなくなる。単なる通過点になるんだな」

オガワ 「あんただって、難しい言い方するじゃないか」

クロエ 「どこが難しい？」

オガワ 「同じことだよ。あんたにとってのはわかりやすいのかもしれないけど、オレには何のことだか、さっぱりわからな」

クロエ 「頭悪いのか、おまえ？」

オガワ 「なんでも自分基準で考えるなよ」

クロエ 「自分基準じゃなかったら、どういう基準で考えるんだ？バカバカしい。おまえ、芸術家のくせに、平均的とか一般的とか、ルールによるととか、普通はとか、教科書によるととか、過去の作品に照らし合わせるととか、慣例ではとか……」

オガワ 「ああ、わかった、わかった。オレが悪かった」

クロエ 「わかってもらえれば、それでいい」

オガワ 「で？」

クロエ 「ギャンブルもスポーツと同じだ。いくら勝ちたいかは人によって違う。1万勝てば十分なヤツもいれば、百億勝ってもまだ足りないヤツもいる。だから、自分がどれくらい勝ちたいのか、自分のゴールはどこなのか、自分基準で設定する必要があるんだ」

オガワ 「それは、わかる気がする」

クロエ 「だろ……要は、すべて自分の問題だ」

オガワ 「でも、自分が信じられなくなるときもあるだろ？負け込んだりして」

クロエ 「まあ、ちよくちよくあるな」

オガワ 「そういうときはどうするんだ？自分以外に信じられるものを用意しとくのか？」

オガワ 「わかったような、わからないような……詭弁なんじゃないの？」

クロエ 「ああ、オレにはオレの神さまがいる」

オガワ 「へえ」

クロエ 「特別に、オレの神さま、見せてやろうか」

オガワ 「ああ……いやいい」

クロエ 「どうして？誰にも見せたことないんだぞ」

オガワ 「いや、ほんとに」

クロエ 「こんな機会、滅多にないんだぞ」

オガワ 「うまいなあ……」

クロエ 「何が？」

オガワ 「オレ、ずっとあんたがほんとは何やってる人なんだろう、って考えてたんだ」

クロエ 「だから、オレはギャンブラーだって」

オガワ 「またまた」

クロエ 「何が、またまた、なんだ？」

オガワ 「あんた、宗教の人だろ」

クロエ 「宗教の人？」

オガワ 「だから……なるほどねえ」

クロエ 「おい、何、納得してんだよ」

オガワ 「申し訳ないけど、オレ、宗教には興味がなくて。だから、どんなに粘ってもムダだから」

クロエ 「おまえ、何か誤解してるだろ」

オガワ 「オレを勧誘してもムダだよ」

クロエ 「誰がそんなことしてんだよ」

オガワ 「どの宗教も神の教えは素晴らしい。でも、それがいったん集団を作り、組織化された途端に、宗教も権力と同じになる。で、そいつはどんな権力よりも強力だ。あんた権力が嫌いだとか言ってたよな」

クロエ 「ああ」

オガワ 「宗教ってのは、権力の別の名前だっことは歴史が証明してる」

クロエ 「だから、オレは宗教とは関係ないって」

オガワ 「隠さなくてもいいって」
クロエ 「隠すも何も……ああ、もういい。見せてやる」

クロエ、銃を出す。

オガワ 「それ、本物？」

クロエ 「ああ」

オガワ 「どうやって手に入れたんだ？」

クロエ 「こんなの、今じゃどこでも買える」

オガワ 「そうなんだ」

クロエ 「持つてみるか？」

オガワ 「いいの？」

クロエ 「ああ。弾丸たまは抜いてある」

オガワ、銃を握る。

オガワ 「すげえ」

クロエ 「銃はいいもんだ。刀はもつといいけど、高すぎる。そういう改造拳銃なら5万も出せば手に入る」

オガワ 「改造拳銃なんだ」

クロエ 「別に遠くの敵を撃つわけじゃないんだから、精度なんか問題ないだろ」

オガワ 「でも、たしかに、こんなのを持つてたら、街歩いてても、なんか自信が湧いてくるだろうな」

クロエ 「ああ。だが、美学のない者は、武器を手にはいけない。引き金を引くときは、人生を賭けなきゃダメだ。撃つべき相手は、自分の人生と引き替えにしてもいいくらいの価値がなきゃダメなんだ」

オガワ 「なるほど」

クロエ 「おまえもほしいか？」

オガワ 「ああ」

クロエ 「じゃあ、競馬の帰りに買いに行こう」

オガワ 「ほんとに？」

クロエ 「ああ。たしかなルート知ってるからさ」

クロエ、手を差し出す。

オガワ 「なんだよ、その手」

クロエ 「5万」

オガワ 「騙したりしないよな」

クロエ 「信じるかどうかは、おまえの問題だ」

オガワ、5万円をクロエに渡す。

クロエ、金を受け取ると出て行く。
オガワ、動かない。

天井から黒い絵が降りてきて、オガワの頭上で止まる。

#5

ナナシとムメイ、花道から現れ、ヒモと箱ののポジションを変える。

ムメイ 「すごいな、大賞取ったんだって？」

オガワ 「え？」

ムメイ 「主催者に聞いたけど、最年少受賞なんだってな」

オガワ 「最年少？」

ムメイ 「なんだ知らなかったのか？今までの記録は25歳で、おまえはそれを4歳も更新したんだぞ！」

オガワ 「え……？」

ムメイ 「評論家も絶賛だ！発想のユニークさ、個性の斬新さ、深いエネルギー。で、絵の魂は、世界の巨匠に匹敵する！ってさ」

オガワ 「……」

ムメイ 「それから、美術年鑑で、日本が世界にアピールできる現代画家の一人として、おまえを選んで、2ページも割いて紹介してくれるらしいぞ」

オガワ 「オレ……今、いくつだ？」

ムメイ 「21だろ、何言ってるんだ？」

オガワ 「ここは……？」

ムメイ 「現代美術館」

オガワ 「……」

ムメイ 「おい、ほんとにどうしたんだ？大賞取ってどうかしちやったのか？」

オガワ 「いや……ああ……夢でも見てるのかと思って……」

ムメイ 「現実だって」

オガワ 「らしいな」

ムメイ 「選評読んだか？」

オガワ 「いや……」

ムメイ、何も書かれていない、二つ折りの白い厚手の紙を取り出す。

ムメイ 「オガワ氏の作品から感じられるのは、精神を集中して静かに察する中から、優れた作品を制作

した後に生ずる、最も深いところの美感、すわなち、自然と人生に対する深い深い懐かしさである。これは、日本の伝統美術の審美であるが、オガワ氏の作品の中には、こうした自然主義の本意があふれている。二十一歳という年齢ながら、深い人生の閱歴は、オガワ氏にすでに優秀な芸術家が必ず持つ独特の気質を備えさせている。彼はさまざまな画題を知り尽くし、胸中の気を自

在に發揮し、芸術に対する没頭と執着によって、最終的にその心境を表現する最も良い途を探し当てた。その作品は奇特でありながら、深奥を失わず、色彩豊かでありながら、奥ゆかしさを失っていない。意のままに筆を走らせているようで、その実、巨匠の心を独自に動かし、簡潔な変換によって、多少朦朧とした稚拙な造形のなかにも、自然に対する深い感銘を描き出している。それはあたかも、水墨画の伝統「書画同源」「書を以って画に入る」の精神の内包を、充分に体現している。黒白、虚実、疎密の間に求めた、時空の自然な真実の姿。激しく動き、跳ねる筆跡の中に、祥と安寧の気韻の美が掌握されている。もっとも独特なのは、絵と書を組み合わせた新機軸である。日本の書道を、具象と抽象の間のさまざまな形象の中に置き、顔料の衝突や筆の感触といった多様な変化を利用したことで、思いもつかない質感を生みだしている。これによって、意図せぬうちに、画家本人も言葉では形容できないような、魂の世界を描き出している。現代的な手法のなかにも、伝統を遮ることはできない。空海、一休、雪舟などの大家の影響と民族絵画の鮮明な特色が、依然として彼の作品の中に潜んでいる。そして多様な表現の背後には、一本の太い線が貫いている。それはすなわち、高貴な精神や品格、気韻生動すがすがしい画境と、魂の息吹の真実が吐露するたゆまぬ努力、「画は人なり」の人生の旨趣、真摯で厳肅な創作態度の欣然とした許諾である。自然と人生、芸術と生活をさらに有効に、完全に結合させると、画家はさらに幅広い創作の境地に迎え入れられるのである。オガワ氏の今後に大いなる期待をする

オガワ 「それって、ヒムスのことを言ってるのか？」

ムメイ 「ヒムス？」

オガワ 「黒い絵」

ムメイ 「ああ、あの絵のタイトル、ヒムスって言うのか。読めなかったよ」

オガワ 「でも、的外れもいとこだな。空海、一休、雪舟？黒い絵だからって、水墨画の影響？日本の伝統？書道なんか関係あるか！バカじゃねえの」

ムメイ 「大声出すな。誰に聞かれるかわからないぞ」

オガワ 「いいんだよ、評論家なんかはどう思われようが。だいたい、何言ってるか全然わからない。おまえだってそう思うだろう？」

ムメイ 「ま、難しい言葉が多いけど……でも、とにかくベタ誉めしてることは伝わってくる」

オガワ 「だから？」

ムメイ 「誰であれ、誉めてくれるのは、ありがたいことには違いない」

オガワ 「それは言えるかもな……とりあえず、大賞に選んでくれたってことは、賞金がもらえるってことだからな。これで絵の具が買える」

ムメイ 「賞金はいくらだ？」

オガワ 「大賞は二百万じゃなかったかな？」

ムメイ 「二百万！」

ナナシ、話に加わってくる。

ナナシ 「さらに、絵が売れば、もっと大金が入ってきますよ」

オガワ 「え？」

ナナシ 「オガワさんですか？」

オガワ 「ええ」

ナナシ 「作品拝見しました。見事な絵だ」

オガワ 「ありがとうございます」

ナナシ 「オガワさん、初めての出品でしょ？」

オガワ 「ええ」

ナナシ 「もう16年も連続でこの美術展に出品してる人もいるんですよ」

オガワ 「そうですか」

ナナシ 「でも、その人、まだ一度も大賞を貰ったことがなくて……佳作が3回。残酷なものですよねえ、才能って。あなたの絵の前で悔し涙、流してました」

オガワ 「……」

ナナシ 「あ、私、画廊を経営しております」

オガワ 「……」

ナナシ 「今まで、どれくらいお描きになったんです？お見受けしたところ、まだお若いけど」

オガワ 「3枚です」

ナナシ 「3枚？」

オガワ 「デッサンや習作はありますが、作品として完成させたのは、これが3枚目です」

ナナシ 「驚いたな……本物の才能ってやつですね」

オガワ 「いえ、そんな……」

ムメイ 「謙遜するなよ」

ナナシ 「その通り。モダニストたちのオリジナリティ至上主義によつて、芸術は難解なものや楽しくないものだらけになってしまった。この黒い絵には、それをいったん塗りつぶしてしまおうという明確な意図を感じる。この黒の向こう側に、華やかな色が踊っている。この黒いトンネルの向こう側には、明るい未来が待っている」

ムメイ 「たしかに」

ナナシ 「メメント・モリ——この作品は、それを想起させます」

ムメイ 「メメント・モリ？」

3人が、それぞれ「メメント・モリ」という音を、好きなようにリピートする。

ナナシ 「ラテン語で、自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな、という意味の警句です。芸術作品のモチーフとして広く使われているのはご存知でしょうか？」

オガワ 「そうなんですか？」

ナナシ 「普通、どこでも習うと思いますがね」

オガワ 「あまり勉強してないもので」

ナナシ 「あなたはクリエイターだから、そういうことは私たちに任せていただいて全然構いませんよ」

オガワ 「はあ……」

ナナシ 「起源は聖書にあります、イザヤ書22章13節。「食べ、飲もう。我々は明日死ぬのだから」しかし、この言葉は、その後のキリスト教世界で違った意味を持つようになった。天国、地獄、魂の救済が重要視されることにより、死が意識の前面に出てきたためです。キリスト教的な芸術作品にお

いて、「メメント・モリ」はほとんどこの文脈で使用されることとなります。キリスト教徒にとっては、死への思いは現世での楽しみ・贅沢・手柄が空虚でむなしいものであることを強調するものであり、来世に思いをはせる誘引となった」

オガワ 「で、それが？」

ナナシ 「つまり、あなたの作品は、伝統に裏打ちされた表現だと言えますね。実に正統的な作家だということですよ」

オガワ 「そうかな？」

ナナシ 「謙遜なさる必要はありません。美術界は、あなたを待っていたんです」

ムメイ 「オレは、すごいヤツを友だちに持ったんだなあ」

オガワ 「賞を取ったからそう思うのか？」

ムメイ 「まさか！前々からオレは、おまえの才能に注目してたに決まってるだろ！」

オガワ 「そのわりには、オレの絵にいろいろケチをつけてたじゃないか」

ムメイ 「才能を認めていればこそのことだ」

オガワ 「へえ」

ムメイ 「オレは、評論家でもないし、研究者でもないからうまく言えないけど、とにかく、おまえの絵が発散するエネルギーには、何かとつもない強さを感じていた」

オガワ 「それはありがとう」

ムメイ 「だからこそ、こうやって認められて、オレもうれしいんだよ」

オガワ 「……」

ナナシ 「前に描いた2枚は？」

オガワ 「家にありますか……」

ナナシ 「ウチで扱わせてもらえませんか？」

オガワ 「え？」

ナナシ 「とりあえず、早急に個展を開きましょう」

オガワ 「でも、個展を開くほど作品がないんです」

ナナシ 「3枚あれば十分ですよ。あとはインスタレーションで、空間芸術にしまえば」

オガワ 「インスタレーションは、やったことがないんです。オブジェも作ったことないし」

ナナシ 「大丈夫。なんでもいいんですよ。まずは、黒にこだわって、ウチの画廊全体をブラックボックスに見立てるとか、とにかく黒いものを置いてみるとか」

オガワ 「黒いものって？」

ナナシ 「なんでも黒く塗っちゃえばいいじゃないですか。それこそ、デュシャンのアイデア借りて、街で拾ってきたものを、オガワさんの感性で黒く塗って、いい感じのタイトルつけば……何かありません、タイトル候補？」

オガワ 「匿名の死……」

ナナシ 「匿名の死！いや、いいなあ。そういうのどんだん考えてくださいよ」

オガワ 「はあ……」

ナナシとムメイ、即興でタイトルっぽい言葉、フレーズ（何か既成のもの／CD、芝居、映画、小説のタイトルであってもかまわない）を次々に口にする。

オガワ 「なんだか、詐欺みたいだな」

ナナシ 「何をおっしゃいますか。大賞受賞作があるんですよ。立派な個展になります。まったく問題ないじゃないですか」

オガワ 「そういうものなんですか？」

ナナシ 「そういうものです」

オガワ 「勉強になります」

ムメイ 「靴とかどうです？」

オガワ 「靴？」

ムメイ 「黒い靴をたくさん集めてきて、表の道路から中に向かって置くんです」

ナナシ 「そりゃいいですねえ。通行人の好奇心も煽れますね」

ムメイ 「僕も個展の開催に参加させてもらえませんか？」

ナナシ 「オガワさんのご友人ですか？」

ムメイ 「ええ。ずっと一緒に絵を描いていたんですが、自分は絵を描くより、展覧会をプロデュースしたりする仕事の方が向いているんじゃないかな、と思っております」

ナナシ 「ほう」

ムメイ 「こういう機会に、いろいろ勉強してみたいんです」

ナナシ 「そうだな、アーティスト・マネージャーは必要ですからね。この先、オガワさんにもそういうポジションの方は必要でしょう。何せ、大金が動きますからね。でも、多くのアーティストは、その辺の管理ができなくて、よく揉め事を起こす。だから、マネージメントの面倒を見てくれる方がいるのは、大変重要なことですよ」

ムメイ 「ああ、そういうこともしてみたいな。どうだ、オガワ？」

オガワ 「え？」

ムメイ 「おまえ、どうせ金勘定とか得意じゃないだろ。オレにやらせてくれないか？」

オガワ 「ああ、そうだな……」

ナナシ 「とにかく、アーティストは周りの人間がきちんと守っていかなければいけないんです」

ムメイ 「はい」

ナナシ 「そして、その才能を大きく育て上げる……それが、我々の使命です」

ムメイ 「そのためには……」

ナナシ 「まずは、アーティストから、経済的な負担を取り除いて差し上げることです。それが一番大切なことです」

ムメイ 「たしかに……金のこと心配してるようじゃ、いい絵は描けませんもんね」

ナナシ 「その通り。オガワさんには、絵の制作に没頭していただいて、我々がそこら辺をちゃんとしないと」
ムメイ 「なるほど……じゃあ、まずはあの黒い絵の複製画……えくと、何って言いましたっけ？ど忘れしちゃった」

ナナシ 「リトグラフ」

ムメイ 「ああ、そうだ。まず、リトグラフを作りませんか？」

ナナシ 「もちろんです。リトグラフは主力商品として欠かせないアイテムです」

ムメイ 「それからマグカップや、コーヒーカップとソーサーセットなんかもいいんじゃないですか？」

ナナシ 「そうそう、ちゃんと名のある食器会社とタイアップしてね」
ムメイ 「あとは……」

ナナシ 「レターセット、クリアファイル、バースデーカード、クリスマスカードなんかの、オリジナル・ア
ト・グッズも必需品でしょう」

ムメイ 「服とかはどうです？」

ナナシ 「服？Tシャツとか？」

ムメイ 「それもありますけど、いつそのこと、オガワにドレスをデザインさせるんですよ」

ナナシ 「なるほど、そりゃあいい！アパレルは持つてますからねえ！どうせなら、ブランド立ち上げるく
らいの目標もつてやりましょうか」

ムメイ 「いいなあ、なんだか、すごくいい！」

ナナシ 「頑張りましょう！」

ムメイ 「はい！」

ナナシとムメイ、手を握り合う。

オガワ、黒い絵を見上げている。

黒い絵が天井に上がっていく。

#6

クロエが戻ってくる。

クロエ 「かゝ、あのバカ馬、ほんとロクでもねえ！雌馬の後ろばつかチンタラ走りやがって発情期か！

フレモンにメロメロか！」

オガワ 「でも、途中までは良かったじゃない。8レースの頃、100万超えたって」

クロエ 「途中までよくても、最後に勝たなきゃ意味がねえ」

オガワ 「いくら負けたんだ？」

クロエ 「全部だ」

オガワ 「全部?!」

クロエ 「ああ、全部だ。なんか文句あるか？」

オガワ 「いや、別に文句は……でも、どうするんだ？」

クロエ 「まあ、しばらくは地味に働いて、元手を作るしかないな」

オガワ 「少し貸してやろうか？」

クロエ 「いくらあるんだ？」

オガワ 「今日は、10レース全部を千円ずつ買って、全敗だったけど……負けたのは1万円」

クロエ 「……」

オガワ 「せこいかな、オレ？」

クロエ、いきなりオガワに抱きつく。

オガワ 「おい！」

クロエ 「おまえはせこくなんかない！それでこそオレの相棒だ！」

オガワ 「そう？」

クロエ 「これでまた、明日、雪辱戦ができる」

オガワ 「明日は、競馬休みだろ？」

クロエ 「ギャンブルつてのは、競馬だけじゃねえ。競輪、競艇、オート……パチンコだってある。それに、バカラだってブラックジャックだって、いくらでも勝負できる場所はある」

オガワ 「それつて、違法ギャンブルだろ！」

クロエ 「ああ、違法だ。違法だからこそ、痺れるような勝負ができるんだ」

オガワ 「捕まったらどうするんだ？」

クロエ 「ちよつと入つて、また出てきたら勝負を続ける」

オガワ 「捕まったことあるのか？」

クロエ 「ないんだな、これが」

オガワ、呆れたようにクロエを見る。

クロエ 「あ、そうだ」

オガワ 「何？」

クロエ 「究極のギャンブルつて、何だか知ってるか？」

オガワ 「究極のギャンブル……そうだな……ルールがシンプルなやつだよな、きつと」

クロエ 「お、いいところに目をつけたな」

オガワ 「誰にでもできて、それでいて奥が深くて、痺れるようなスリルを味わえる……」

クロエ 「それは何だ？」

オガワ 「ジャンケン？」

クロエ 「おい！子供の遊びじゃないんだぞ」

オガワ 「でも、ジャンケンだつて100万も賭けてたら、いきなり子供の遊びじゃなくなる。物凄く頭使
うし、かなり命がけだ」

クロエ 「そんなもん、ジャンケンじゃなくなつて、全財産賭けてれば、どんなギャンブルだつて同じだろ。
実際オレは、今日だつて10レースに百万以上突っ込んだ」

オガワ 「つまり、賭け金の問題じゃないやつつてことか」

クロエ 「そう」

オガワ 「それは、面白いつてこと？」

クロエ 「面白いかどうかはわからん」

オガワ 「え、何だよ？オレ、あんたと違ってアマチュアだから見当もつかない」

クロエ 「じゃあ、教えてやる」

オガワ 「何？」

クロエ 「ロシアン・ルーレットだ」

オガワ 「ロシアン・ルーレット？」

クロエ 「銃に、弾丸を一発入れて、交互に引き金を引くんだ、自分のこめかみに銃口を当ててな」
オガワ 「死んじゃうだろ、負けたら」
クロエ 「だから、究極のギャンブルなんだ。賭けるのは、自分自身」
オガワ 「……バカバカしい」
クロエ 「ああ、バカバカしい。だから、小説や映画には出てくるけど、実際には誰もやらない」
オガワ 「当たり前だ」
クロエ 「ただ、実際にやる場合、恐くなったら、天井に向かって引き金を引いてもいいらしい。もちろん、その時点で負け」
オガワ 「まさか……やりたいのか？」
クロエ 「まさか」
オガワ 「だよな」

間。

オガワ 「銃はいつ手に入るのかな？」
クロエ 「さあ……バイヤーを信じて待つしかない」
オガワ 「ほんとに買いに行ってくれたのか？」
クロエ 「5万預かっただろ」
オガワ 「でも、先に帰れって言うし……バイヤーにも会わせてくれなかった」
クロエ 「おまえは、ああいうところに顔を出さない方がいいと思ったんだ」
オガワ 「だけど、何にも言わないから、パチンコでもやって負けたのかと思った」
クロエ 「オレが相棒にそんな真似をと思うのか？」
オガワ 「ごめん」
クロエ 「つたく、オレを誰だと思ってるんだ」
オガワ 「だから、ごめんって……あ、そう言えば、まだあなたの名前聞いてなかった」
クロエ 「そうか？オレはおまえの名前知ってるぞ、オガワだろ」
オガワ 「確かに、オレはオガワだけど、あんたは？」
クロエ 「クロエです」
オガワ 「クロエ？ほんとに？」
クロエ 「どういう意味だ？」
オガワ 「だって……まあ、いいか」
クロエ 「まあいいってなんだよ、失礼だな」
オガワ 「ごめん……でも、不思議だな」
クロエ 「何が？」
オガワ 「オレ、基本的に一人でいるのが好きなんだけど、あんたと一緒にいても、あんまり違和感ないんだ」
クロエ 「へえ」
オガワ 「なんでだろ？」
クロエ 「それは、おまえのしている世界と、オレが見ている世界が似てるからじゃないかな」
オガワ 「そうか……」

クロエ 「子供の頃よく、オレが今見ている赤という色は、ほかのみんなにも同じように見えてるのかって不安になったりしなかったか？自分だけが、世界を違う風に見てるんじゃないかって」

オガワ 「なった」

クロエ 「でも、それはどうしても確かめることができない。そんなとき、絵を見たり、音楽を聴いたりすると、自分と同じように世界を見ていたり、聴いている人間がいることに気づかされる。で、安心する」

オガワ 「うん」

クロエ 「だから、よくわかんないけど、そういう自分と同じ目や耳を持った人間の作った作品に出会うと、それがどんな悲惨な状況を描いていたか、先の見えない閉塞感を暗示していても、なんだかうれしくなるんじゃないかな。少なくともオレはそうだ」

オガワ 「……あんた、結構ちゃんとしたこと話せるんじゃない」

クロエ 「うーん、おまえは、まだ何かオレを誤解しているようだな」

オガワ 「かもしれない」

クロエ 「ま、それはそれでいい」

オガワ 「……」

クロエ 「ちょっと出かけてくる」

オガワ 「今帰ってきたばっかりなのにな？」

クロエ 「駅前のパチンコ屋が新装開店なんだ」

オガワ 「でも、あんた金ないんだろ」

クロエ 「ま、こういうときのために、カードにいくら残してある」

オガワ 「カードなんか持つてるの？意外」

クロエ 「クレジットカードじゃない。パチンコ屋のカード。玉を貯められるんだ」

オガワ 「へえ。いろいろ考えてるんだ」

クロエ 「もちろん」

オガワ 「それも必勝法の教え？」

クロエ 「大きく言えばな」

オガワ 「まだ、教えてくれないのか？」

クロエ 「ああ、まだダメだ」

オガワ 「あ、そう」

クロエ 「じゃあ、行ってくる」

クロエ、花道から出て行く。

#ブリッジ

オガワが一人になると、様々ところから、複数の人間の声（録音・加工）が聞こえてくる。

ナナシ 「だから、三十までに死んでくれたらいくらでも買いますよ」

ムメイ 「ちゃんとしろよ」
ナナシ 「仕事に就きなさい。ちゃんとお金のもらえる仕事に」「もうきみの絵をいいというような評論家はどこにもいないよ」

ムメイ 「年金払ってない?」「選挙くらい行けよ」
ナナシ 「将来のことどう考えてるんだ?」

ムメイ 「もしもし……今、何時だと思ってるの?」

ナナシ 「普通はね、そうはしない」

ムメイ 「古いなあ」

ナナシ 「売れないね」

ムメイ 「そんなことも知らないの?常識よ」

ナナシ 「もう、お酒はやめて」

ムメイ 「つまらない」

ナナシ 「誰もいないわよ」

ムメイ 「え、スポーツセンターのグラウンドで寝てた?」「何がしたいのか、わからない」

ナナシ 「ゴッホならね」

ムメイ 「ダヴィンチならね」

ナナシ 「ダメ」

ムメイ 「もう来ないで」

ナナシ 「ありきたり」

ムメイ 「また貸して?」

ナナシ 「絵画とは世界を映す鏡」

ムメイ 「絵画は欲望の表象」

ナナシ 「え、金持っていないのに飲みにくるなよ」

ムメイ 「文明はかならずしも人を幸せにしない」

ナナシ 「人は必ずしも世界の中心にいない」

ナナシとムメイ、花道から現れ、ヒモをオガワの体に巻き付けていく。

オガワがどんだんがんにがらめになったように見える。

最初はポツポツ聞こえていた声が、次第に何人もの声が同時に聞こえてくるようになる。

そして、プロローグと同様な加工された声のコーラージュとしてオガワを取り巻く。

オガワが悲鳴をあげる。

オガワ 「黙れ!」

7

クロエ、紙袋を持って、花道に現れる。

クロエが舞台に近づくと、黒い絵が天井に消える。

クロエ 「おい、何やってんだ？」

オガワ 「……」

クロエ 「なんかわからんが、新しい芸術か？」

オガワ 「……」

クロエ、オガワを縛り付けているヒモを外そうとする。

ムメイ、クロエを阻止する。

ムメイ 「やめてください」

クロエ 「なんだ、おまえ？」

ムメイ 「もうこれ以上オガワにつきまとわなくてももらえますか」

クロエ 「つきまとってなんかいない」

ムメイ 「じゃあ、なんでいつまでもここにいます？」

クロエ 「なんで？ここはオレの家だ」

ムメイ 「はあ？おい、いいのか、オガワ、こんなこと言ってるぞ」

オガワ 「……」

クロエ 「こいつは、オレの相棒だ。で、相棒の家はオレの家だ。何かおかしいか？」

ムメイ 「おかしいに決まってるだろ」

クロエ 「どこが？」

ムメイ 「あのな、まっとうな人間は、ちゃんと区役所に住所を登録してあって、そこが自分の家なの。でね、持ち主に許可なく他人の家に入り込んだら、それは不法侵入で犯罪なの」

クロエ 「犯罪？」

ムメイ 「ああ、そうだ」

ナナシ 「バーの一件で、被害届を出さなかった、私の好意を無にしないでいただきたいなあ」

ムメイ 「本当に犯罪者にされる前に行け。その方が、おまえのためだ」

クロエ 「あんたたちこそ、もうこいつを放っておいてやったらどうなんだ？」

ナナシ 「は？」

クロエ 「もう、こいつを助けてやろうなんて気はないんだろ？」

ナナシ 「とんでもない。(ムメイに) ねえ」

ムメイ 「もちろん。オレたちは、何とかオガワに立ち直ってもらいたいだけですよ」

ナナシ 「そうそう」

クロエ 「なんだ、そうなんだ」

クロエ、ヒモを外し続ける。

ムメイ 「おい、やめろよ」

クロエ 「……」

ムメイ 「やめろって言ってるんだよ」

ムメイ、クロエの肩をつかんで振り向かせると、腹部にパンチを見舞つ。

クロエ、腹を押さえて、うづくまる。

ナナシ、拍手する。

ムメイ、クロエを起き上がらせ、さらに腹部に膝蹴りを入れる。

クロエ、床に崩れ落ちる。

ムメイ、クロエの尻の辺りを蹴る。

ムメイ 「いい加減にしろよ！このホームレス野郎！おまえの居場所はここにはないんだ。とっとと出て行け！」

ムメイ、さらに、もう一発クロエを蹴る。

クロエ、スロープの方へ這っていく。

ムメイ 「二度と来るなよ！」

ナナシ、外されたヒモを、再びオガワの体に巻き付けようとする。

クロエ、スロープの箱の上から、紙袋を持って戻ってくる。

ムメイ 「……まだ、何か用か？」

クロエ 「豆食います？」

ムメイ 「豆？ いらないね」

クロエ 「そんなこと言わずに」

ナナシ 「なんだってきみは、そういちいち口を出すのかね？ これは、きみには関係のない話だろ？」

ムメイ 「顔の形変えられたくなかったら、おとなしく帰れ」

クロエ 「うるせえ」

ムメイ 「は？ 何か言ったか？ 生意気な口叩くと、二度と喋れなくしてやるぞ」

ナナシ 「そうしてやった方がいいんじゃないか？ うるさいから」

ムメイ 「ですかね？」

クロエ 「うるせえのは、おまえらの方だ」

ムメイ 「まだわからないようだな」

ムメイ、クロエの胸ぐらを掴む。

クロエ 「黙って鉄の豆でも腹一杯食ってな」

クロエ、紙袋をムメイの腹に押しつけ、袋の中で銃の引き金を引く。

銃声。

のたうちまわるムメイ。

紙袋を突き破って、銃身が姿を現している。

ムメイ、花道へ這って行く。

クロエ、ムメイの体を踏みつけ、もう2発撃ち込む。

ムメイ、息絶える。

クロエ、ナナシを見る。

ナナシ、慌てて携帯電話を取り出し、110番しようとしている。

クロエ 「警察に電話か？」

ナナシ 「……」

クロエ 「自分の身は自分で守れよ」

クロエ、ナナシの手首をねじり上げて携帯電話を奪い取ると、床に落として踏みつける。

ナナシ、花道を走って逃げようとする。

クロエ、ナナシに向けて発砲する。

銃声。

ナナシ、花道で倒れる。

クロエ、ナナシに駆け寄り、さらに2発撃つ。

ナナシ、息絶える。

クロエ、オガワの紐を外す。

オガワ 「どうするんだよ……二人も殺しちゃって」

クロエ 「おまえを助けてやったんだぞ」

オガワ 「そんなこと頼んだか？」

クロエ 「頼まれはしなかったかもしれないな」

オガワ 「……」

クロエ 「でも、おまえは相棒だから」

オガワ 「……引き金を引くときは、人生を賭けなきゃダメなんじゃないのか？」

クロエ 「……」

オガワ 「撃つべき相手は、自分の人生と引き替えにしてもいいくらいの価値がなきゃダメなんだろう！こいつらに、あなたの人生と引き替えにしてもいいくらいの価値があるのか？」

クロエ 「こいつらを撃つたのは、まあ、言ってみれば前座だ」

オガワ 「え？」

クロエ 「前座だよ。メイイベントの前の肩慣らし」

オガワ 「なんのことだ？」

クロエ 「本番はこれからさ」

オガワ 「……」

クロエ、銃を目の前に持ってくる。

クロエ 「こいつらに、5発撃った」

オガワ 「……」

クロエ 「つまり、弾倉には、まだ1発残ってる」

クロエ、弾倉を回す。

オガワ 「……」

クロエ 「ロシアンルーレットをしよう」

クロエ、銃口をこめかみに当ててみせる。

オガワ 「……」

クロエ 「どうだ？」

オガワ 「何でオレがそんなことしなきゃならないんだ？」

クロエ 「何でかな……オレと向き合っちゃまったからじゃねえかな」

オガワ 「理由になってない！」

クロエ 「そうか？でも、もう逃がさない」

オガワ 「ふざけるな！オレはやらない！」

クロエ 「どうして？」

オガワ 「どうして？そんなバカなことに命かけられるか！」

クロエ 「へえ。じゃあ、何になら命を賭けられるんだ？絵を描くことか？絵を描くつてのはそんなに立派なことなのか？」

オガワ 「なに！」

クロエ 「メシ食ったり、酒飲んだりするのとどこが違う？」

オガワ 「黙れ！」

クロエ 「うまいメシ食った方が、ダメな絵、何枚も描くより、よっぽど喜びがあるんじゃないのか？」

オガワ 「あんたにはわからないだ！」

クロエ 「じゃあ、おまえは絵を描くことを賭ければいい。勝って生き残れたら、いくらでも絵を描いてもいいと神さまが言ったと思えばいい」

オガワ 「ふざけるな！」

クロエ 「ふざけちゃいない。絵を描くことに命を賭けてるなら、やってみろ」

オガワ 「どうしてもやりたいなら、誰かあんたみたいに頭のおかしい人間を探してやってくれ。オレはやらぬ」

クロエ 「ダメだ」

オガワ 「ダメ？」

クロエ 「ああ、もう決めたんだ」

オガワ 「なんだと！」

クロエ 「もしおまえがやらないなら、オレはおまえをpushさえてつけて、おまえの頭に6回引き金を引いてやる。で、確実におまえの頭をぶち抜く」

オガワ 「……」

クロエ 「どうする？やれば2分の1の確率で助かる。やらなければ100%あの世行きだ」

オガワ 「……頭がどうかしてるんだ」

クロエ 「自分を信じて見ろ」

オガワ 「……」

クロエ 「それに、もし負けても即死だから、いやな現実からも解放される」

クロエ、箱の上に銃を置く。

オガワ、引き金を引く。

弾丸は出ない。

クロエ 「よかった」

オガワ 「よかった……？」

クロエ 「ああ、いきなり当たり引かれたら、面白くないだろ……でも、ま、6分の1だからな」

オガワ 「……」

クロエ 「さあ、オレの番だ」

クロエ、引き金を引く。

弾丸は出ない。

クロエ 「よし！今日はついてるぞ。さあ、おまえの番だ」

オガワ 「……もう残ってないんだろ」

クロエ 「え？」

オガワ 「弾丸だよ。いくらあんたが痺れるような勝負したいからって、ほんとに命賭けてこんなバカなこと
ができるわけがない」

クロエ 「オレが、そんなヤワな勝負すると思うか？」

オガワ 「死ぬんだぞ」

クロエ 「オレは自分を信じてるからな。必ず勝つって」

オガワ 「バカ言え」

クロエ 「何もそう深刻になることはない。当たりを引いたら即死だ。すぐに天国へ行ける。別にこの世に
未練があるわけでもないだろ」

オガワ 「……」

オガワ、銃を取ると、銃口をクロエに向ける。

クロエ 「次に弾丸が出ると読んだのか？」

オガワ 「撃つぞ」

クロエ 「撃てよ。そのかわり、弾丸が出なかったら、オレはおまえを押さえつけて、弾丸が出るまで引き
金を引いてやる。オレを撃って弾丸が出る確率が4分の1。弾丸が出ないで、おまえの頭に弾丸

オガワ 「……」
オガワ 「がぶち込まれる確率が4分の3。おまえの生き残る確率は2割5分ってことだ。どうする？」

クロエ 「打率2割5分の選手ってどう思う？」

オガワ 「……」

クロエ 「上位打線打つには物足りないけど、守備が抜群で、足が速くて送りバントとか、小技が得意な選手だったら問題ない数字か？」

オガワ 「知るか……」

クロエ 「ま、でも、4回に3回は凡退するってことだから、大した選手じゃねえよな」

オガワ 「……」

クロエ 「おまえは頭いいんだ。ちょっと考えれば、どっちの確率がいまいわかるだろ？」

オガワ、銃口を自分のこめかみに当てる。

クロエ 「さすがに頭がいいな。それが正解だ。本物のギャンブラーは、分の悪い方には賭けない。引け！」

オガワ 「……」

クロエ 「引け！」

オガワ、引き金を引く。

弾丸は出ない。

クロエ 「3分の1か……痺れるな。(絶叫する)ジー(ザス)！」

クロエ、引く。

弾丸は出ない。

クロエ、笑う。

オガワ 「……」

クロエ 「さあ、いよいよ2分の1だ。どうする？オレを狙って撃ってみるか？弾丸が出るも出ないも同じ確率だ」

オガワ 「……」

クロエ 「それとも、オレに向けて2回引き金を引くか？2回なら、オレに押さえつけられる前に引けるかもしれないぞ」

オガワ 「……」

クロエ 「だけど、おまえの言うように、弾丸は出ないのかもな」

オガワ 「……」

クロエ 「どうする？言っておくが、オレに向けて引き金を引いたら、おまえを締め殺してやる」

オガワ 「……」

クロエ 「オレを狙うかおまえ自身か……どっちにしても、人生を賭けて引き金を引くしかない」

オガワ 「……」

クロエ 「自分の信じる方に向けて引け」
オガワ 「オレは……自分を信じる！」

オガワ、銃口を自分のこめかみに向けて引き金を引く。
弾丸は出ない。

オガワ 「やっぱりそうだ。出るわけないんだ。当たり前だよな」

クロエ 「おまえは思った通りのやつだ……」

オガワ 「とにかくオレの勝ちだ」

クロエ 「……まだオレの番が残ってる」

オガワ 「あなたの勝ちはもうない」

クロエ 「……」

オガワ 「なるほど。どっちにしろ弾丸は出ないんだから、引き分けがあるってことか」

クロエ 「……」

オガワ 「でも、勝負はついたんだ。5発目をオレが引いたことで、例え6発目が出なくてもオレの勝ちだ。
違つか？」

クロエ 「一発逆転がある」

オガワ 「どんな？」

クロエ、銃をオガワに向ける。

オガワ 「……そういうことか」

クロエ 「そういうことだ」

オガワ、床に膝をついて、顔をクロエの方へ向ける。

オガワ 「……撃てよ」

クロエ 「弾丸は出ないと信じてるってことか」

オガワ 「もう、そんなことはどうでもいい。撃てよ」

クロエ 「不発弾じゃないかぎり、次は弾丸が出る」

オガワ 「そうなのかもな」

クロエ 「恐くないのか？」

オガワ 「恐いさ」

クロエ 「じゃあ何で逃げ出さない？」

オガワ 「逃げてても意味ないからだ」

クロエ 「諦めたってことか？」

オガワ 「いや……」

クロエ 「じゃあ？」

オガワ 「理由なんか知るか！ただここで逃げたら、一生後悔するような気がするだけだ」

クロエ 「……おまえ、バカだな」
オガワ 「ああ、バカさ。それがどうした？」
クロエ 「相棒にはできない……」
オガワ 「助かるよ。さっさと撃て」
クロエ 「ギャンブルの必勝法を教えてやる」
オガワ 「今さら……」
クロエ 「まあ、聞いておけ」
オガワ 「……」
クロエ 「勝つまでやめない」
オガワ 「え……？」
クロエ 「勝つまでやめない。忘れるな」

音楽。

クロエ、銃口を自分のこめかみに向ける。

暗転。

銃声が響き渡る。

#エピローグ

舞台の中心に、イーゼルに立てかけられた、真っ白なキャンバスがある。
花道に近いところの箱に、クロエがすわっている。
クロエ、黒い絵を持っていく。
オガワ、油絵の道具を運んでくる。
クロエ、黒い絵を箱に立てかけて、笑顔を残し、花道から去っていく。
オガワ、キャンバスに向う。
照明がゆっくり消える。

鈴木勝秀 (suzukatz.)

〔以上〕